

タイで日本語の先生をやって思うこと

国際交流基金アジアセンター
“日本語パートナーズ”タイ4期
原田晴義



授業風景（左端が筆者）

子どもの頃の夢のひとつが先生になることであった。少し回り道をしてしまったが、63歳になって行動に移した。

少し中国語が話せるので、まず中国人にボランティアで日本語を教えることを考えたが、教える経験が全くないのも心細い。短期の日本語教育講座を受講して指導のコツを教わった後、地元に住む外国人の小中学生を対象とした日本語講座を見つけて扉をたたいた。だが日本語を文法や理屈で教えようとする、これが難しい。動詞や形容詞の語尾の変化も一様ではない。日本語はつくづく難解な言語だと思い知らされた。

夢の実現に向けバンコクへ

国際交流基金が募集している“日本語パートナーズ”に応募したのは、短期の日本語教育講座が終了して間もなくの一昨年（2015年）の9月。昨年1月にタイ4期生（期間は約10カ月間）での派遣が決まり、3月後半からの約1カ月間、同日本語国際センターの研修所でタイ語の特訓と先生に必要な知識を身につけた。日本語教育以外にも折り紙、着付けの仕方、お茶など覚えることがたくさんあったが、折り紙以外にはわか仕込みで正直なところ不安も抱えながらのバンコク赴任であった。

国際交流基金アジアセンターが行っている“日

本語パートナーズ”派遣事業は現地の日本語教師のアシスタントとして日本語教育をサポートするもので、正しい日本語の発音、特に会話能力の向上と日本文化を紹介するのが主な仕事である。2014年から始まっており、昨年までにすでに500人を超えるパートナーズがインドネシア、タイ、ベトナムなどのアジア諸国に派遣されている。

赴任した学校はバンコク市内から車で北へ1時間ほどのところにあり、1800人が学んでいる。中学1年から高校3年までの6年制で、生徒数はバンコクでは少ない方の部類に入るといえる。日本語の授業は、中学生は選択科目でいろいろな挨拶や日常生活で使う少しばかりの言葉を覚え、本格的な学習は高校1年生になってから。文字はひらがな、カタカナ、漢字の順番で学習する。本校では日本語の他にも中国語やフランス語のクラスがある。生徒が日本語を選んだ理由は少なからず日本文化に関心があるからで、アニメや漫画、ゲーム、J-POPの影響が大きい。それ以外でもかなり前から七夕などはタイ人にもよく知られており、7月になると全校生徒が参加する七夕フェスティバル



七夕フェスティバルで生徒たちと